法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

日韓古典文学における男女の愛情関係ー『李娃物語』と『王慶龍伝』を中心にー

山田, 恭子 / Yamada, Kyoko

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
異文化 / 異文化
(巻 / Volume)
5
(開始ページ / Start Page)
108
(終了ページ / End Page)
126
(発行年 / Year)
2004-04-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002101

Hosei University Repository

日韓古典文学における男女の愛情関係
－『李娃物語』と『王慶龍伝』を中心に－

山　田　恭　子

1．はじめに

『李娃物語』は唐代伝奇小説『李娃伝』の翻案小説であり、江戸時代の写本が内閣文庫本として現存する。その他には、内閣文庫本を活字にしたものが『室町時代物語大成　補遺二』[1]に収録されている。それによると『李娃物語』は「江戸時代の写しである」となっているが、天正（1573～1592）頃とする説[2]もあり、具体的な筆写年代および作者については未詳である。[3]

一方、『王慶龍伝』[4]は、『李娃伝』を改作した明代の小説『玉堂春落難逢夫』[5]の翻案小説であり、「慎独齋」金集（1574～1656）によって筆写され、「慎独齋手澤本伝奇集」[6]に収録されている。その成立年代については、『玉堂春落難逢夫』所収の『警世通言』の刊行年代が1624年であることから、1624年から1656年の間と推定される。[7]

従って、両作品のあらすじ[8]はほぼ同じであるが、個々の場面描写は中国作品とかなり異なり、それぞれの創作性が見られる。特に男女の結縁過程、妓母と女主人公の関係、そして「色」に対する見解がそうである。

本稿ではこうした創作性に留意し、両作品における男女の愛情関係について比較したい。なぜならば、これまでの研究では、愛情関係を中心としたものは少ない上に、その内容も中国作品との影響関係だけにとどまり、『李娃物語』と『王慶龍伝』を直接比較したものはなかったからである。[9]

Hosei University Repository

2．男女の結縁過程について

まず『李娃物語』における結縁過程については、薩摩の左衛門安森の息子である中将安則が、嵯峨の僧を訪れた帰りに、偶然にも年十六歳ほどの美しい女房が琵琶を弾くのを見たことから始まっている。恋の病となった安則は、見舞いにきた親友の飛騨三郎国光に病の理由を述べ、ようやく相手の女房が李娃という白拍子であることを知る。親友である国光は金がなければ一夜の契りですら難しいことを忠告するが、安則は命を落としても惜しくないと李娃のもとを訪れるのである。

ここで重要なのは、安則と李娃の出会いが偶然なものであり、その気持ちが以下のように一貫して「恋」という言葉によって表されていることである。

> 忍レド、色ニ出ニケリ、我ガ恋ハ、物ヤ思フト、人ノ問フマデ（622頁上）[10]
> 年ノ程二八計ナル女房ノ、琵琶ヲ弾ジテ居タルヲ、白地（アカラサマ）ニ見テシヨリ、遂ニ恋ノ心地無止（622頁上）
> 過シ日外、早目ニ、君ヲ見テシヨリ、恋路ノ憶ヒニ耐兼テ、是迄忍ビ参リテ候（624頁上）

『李娃物語』における結縁過程は、男が女に恋し、妻問いを始めるという日本の伝統的恋愛パターンと大いに関係している。また、安則の「我ナカラ墓ナノ心迷ヤ、世ハ皆、夢ノ中ノ現トコソ、思ヒ捨ル事ナルニ、是ハソモ何事ノ化シ心ソヤト、思棄給ヘ共、尚、文悪（アヤニク）ナル御心、胸ニ充テ、無限、御物思ニ成テ、無為方、思召煩ハセ給ヒケル」[11]という言葉は、世を仮初めと悟っていた人の、一転して「苦界での煩悩」にまどう姿を表している。そして、安則の李娃との出会いは、仏教的な悟りをめざす世界から愛欲の世界への転落であったといえよう。[12]

一方、『王慶龍伝』における結縁過程は、偶然の出会いではなく、娼楼に対する好奇心から始まっている。[13]父の命を受け、商人に貸したお金を受け取った慶龍は、娼楼に立ち寄り、十四歳の美しい童妓「玉丹」を見かける。そして老婆を介して二人は出会うことになるのである。

Hosei University Repository

ここで慶龍は、美しい玉丹を「神仙」、すなわち「仙女」に例え、その恍惚とした気持ちを表している。

> 其中有一小娥　手把碧芙蓉一朶　超班独立　精曜華燭　望若神仙焉　慶龍不覚注目　謀欲一回見　但恨無以為縁（中略）光彩動人　天姿仙態百勝朝雲　真世間所未有之国色也（中略）龍見丹容華儀飾　似非塵世人　尤不覚驚悦（191～193頁　下線・太字：全て筆者による）[14]

女性を仙女にたとえるのは、夢の中で「仙女と快楽の時を過ごす」という「非現実世界」の表れであり、唐の時代には、「仙」は「妖艶な婦人」や「妓女」を指す場合もあったとされる。[15]また高麗時代の詩世界では、妓女や方丈の長老が存在し、[16]酒や月を楽しみながら自ら神仙になるといった神仙思想を反映した内容や、浪漫的な表現が多く見られる。[17]

以下は、慶龍が玉丹に送った最初の詞であるが、夢中で仙女と出会い、神仙になったかのような境地が詠まれている。

> 昔被瑤笈好学神仙　燒尽金丹十年　洞庭蘭香[18]　鐘陵彩鸞[19]　那知月中有縁[20]　今夕相逢歌　弄白玉簫　奏緑綺絃　酒酣更尽一枕　宜向藍橋眼[21]　一登玉大綺筵　睹佳人美人蘭蕙[22]相連　天姿綽約　仙態宛転　疑是紅蓮映白蓮　詞婉調清　珠明滄海月　玉潤藍田[23]烟　却怕此身　羽化経到蓬萊邊（194頁）[24]

このような表現は、特に17世紀韓国の愛情伝奇小説に多く見られ、[25]男性側の恋愛感情を示す常套手段であったと考えられる。そして恋愛感情が神仙思想を反映した「非現実世界」として表されたのは、当時の自由恋愛は他ならぬ反道徳行為であり、奇異な出会いとして扱われるしかなかったということと関連している。[26]

また、これら両作品の結縁過程では、最初に男性の女性に対する一方的な気持ちが示され、女性の気持ちはその場で表されないという共通点がある。女主人公の気持ちは、男性の気持ちが示された後に、ややしばらくしてから答える形となっているのである。

Hosei University Repository

『李娃物語』の場合、最初に李娃は、安則の姿を見て、目を凝らし微笑み返すだけである。[27]そして安則が李娃に告白した時に、ようやく自分の気持ちを述べている。

> 女房、熟熟ト聴キテ、君ナン角思シ召し給ウカ、自モ亦同シウ、角思ケルモノヲ、流石ニ、女房の身ナレハ、ヱコソ申シ侍ラネト、最闌麗ニソ、持テ成ケル（624頁上）

その間、李娃は自分も安則と同じ思いであったことを告げ、「最もみやびやか」にもてなす。そして安則は李娃の様子を見て、「イトヽ思モ不浅、寔ニ、思シ事」[28]と、心も空に浮かれつつ一夜を共にする。また錦綾などを送り、李娃と偕老の契りを結ぶことを「恋侘」びるのである。

それに対し李娃は、「一樹ノ陰ニ宿リ、一夜ノ契ヲ締モ、是皆多生ノ縁ソカシ、況ヤ、我モ思離ヌ中ノ事ナレハ、君サエ、角思召給ハヽ、吾、ナト否ト、辞シ申ヘキ」[29]と言い、妹背の契りを結んでいるが、「多生ノ縁」とは「多くの前世をへる間にむすばれた因縁」[30]のことで、この言葉は『平家物語』巻七「福原落」にある「一樹の陰に宿るも前世の契不浅、同じ流れを結ぶも、多生の縁猶深し」というくだりによる。つまり李娃は、男女の仲を、前世からの縁によるもので、運命的なものとして受け止めている。また、その根底には「代に無定き者は、男女の習い也」[31]といった「男女の仲のはかなさ」がみられ、日本の古典文学における男女関係の基調が端的に示されているといえよう。

一方、『王慶龍伝』の場合でも、玉丹の感情はすぐには表されない。玉丹は慶龍の詞を聞いても、最初は艶めかしい様子で、恥ずかしがって顔を上げないままでいる。そして妓母や姉にあたる朝雲の催促を受け、ようやく次の詞を詠むのである。

> 江有梅　山竹有　清標肯同凡卉　春不開　秋不落　貞姿謾托荒苔
> 疎略枝霜後青　寒蕊雪中香　寄言葉尋芳客　莫比花柳場（195頁）[32]

ここでまず興味深いのは、玉丹が妓女でありながら、「花柳場」での如く接してくれるなと慶龍を制止している点である。この点で玉丹は、男女

Hosei University Repository

の仲を「多生ノ縁」としてあっさり受け入れた李娃とは、かなり異なる。そして慶龍が「既に遍く見てきたので、願わくば一夜を共に」[33]という詞を詠むと、ようやく「美しい眉を開き、暗に眼差しを送る」[34]のである。

その後、玉丹は慶龍と一夜を共にするが、ここで玉丹は、もともと自分は良家の娘であったが、両親が亡くなり妓母に育てられた経緯を述べる。また一度関係を結べば他人とは逢わないつもりなのに、妓女として扱われるのではないかと、不安な気持ちを表している。[35]そして、慶龍が偕老することを誓うと、[36]「それならば、(寵を)賜るのも浅からず」[37]と、遂に枕を交わすのである。

ここで言えることは、白拍子として「人ヲ誑カ道」を実践した李娃と、妓女としての身分を不服に思い、相手に対する気持ちを「節」として示した玉丹との違いである。この時点で李娃は、白拍子としての態度を貫くだけで、安則との真の愛情関係を築いているわけではない。それは「最閑麗(ゼンレイ)ニソ、持テ成ケル」というすぐ後の句節に、「誠ノ心ニテハ、ヲハセネト、猶モ中将殿ノ、思付カセ給フ様ニトノ、謀也トソ聞エシ」とあることからも分かる。よって李娃の真の愛情は後半部、落ちぶれて乞食となった安則と再開した時に、「我人望ナフ、情無リシ故」と悟り、始めて成立する。

> 今思合スレハ、誠ニ我ハ、人無ソ、<u>アノ心ナキ草木ヲ見ルニサヘ、善志ヲ得ン事ヲ願フソカシ、矧ヤ人ノ身ヲヤ</u>、中将、角乞食ヲ仕給フモ、誰故ニテ有ソ、<u>我人望ナフ、情無リシ故ソカシ</u>ト、嫋シウ不時ニ俊悟シテ（631頁上）

ここで李娃のいう「善志」とは「あはれ」であろう。つまり、草木に対してですら「あはれ」を感じるのに、まして人に対して感じないことがあろうかと思った時、李娃は始めて安則に「情(なさけ)」[38]をかけ、真の愛情関係を築いていくのである。

一方、玉丹の場合、「節」を守ることによって、二人の愛情関係を維持するのだが、玉丹の「守節」は慶龍への愛であると同時に、婦徳を守ることでもあり、それが妓女の身分上昇意識と深く結びついている。[39]特に「若能如此　為<u>賜</u>不浅」「今若一<u>媚</u>公子　誓不再事他人」といった表現には

Hosei University Repository

玉丹の慶龍に対する身分意識が働いているといえよう。このことは、後に玉丹が慶龍に送った手紙の一節である「可報旧恩」[40]からも明らかである。

3．女主人公と妓母の関係

『李娃物語』では、女主人公が自ら安則を欺き、それを悔い改めた後、相手の面倒を見ることを決意しており、妓母も女主人公の立場を慮ってそれに反対しない。しかし『王慶龍伝』では女主人公が始終一貫して慶龍への「節」を主張する一方、妓母はそれを阻む金銭欲の強い人物として対立している。ここではそうした女主人公と妓母の関係について述べたい。

『李娃物語』では男女の愛情関係が当事者同士の意思によって進められる。したがって妓母は、二人の関係において、さほど大きな役割を占めない。李娃が安則と夫婦の契りを交わす際も一応妓母の承諾を得ているが、「サレハ、古伝ニモ、男女ハ、人之大欲存焉ト云リ、此道ト云モノハ、高キ賤モ、其身サヘ、思離ヌ中ノ事ナラハ、母制ストモ、ナト従フヘキ、其ハ兎(ママ)モ、ワコセ次第」[41]というだけで、特に干渉しないのである。

従って、安則が落ちぶれ乞食となったのも李娃のせいであり、李娃は最初から白拍子として安則の財産を使い果たさせる。そして北野の縁日に行くついでに安則と一緒に姨の所を訪れ、妓母が急病になったという口実で一人自宅に戻った後、行方不明となってしまうのである。この計略は「内々ハ母コセモ、姨母君ニ、内ヲ語ラセ給ヒテソ」[42]というように妓母も関与している。しかし、「元ヨリ白拍子ハ、人ヲ誑カ道ナレハ、中将殿ノ嚢中ノ、悉尽タンナルヲ見テ、何ニモシテ、中将殿ノ中ヲ離レン様ニト計ケル」[43]とあるように、基本的に李娃が首謀したことになっており、妓母が仕組んだわけではない。

また乞食となった安則を養育することに対しても、妓母は最初追い払うよう指示したものの、やがて李娃の意見に説得され、その意志を尊重している。

> 人ノ命ハ、只春ノ夜ノ夢ノ如ク、偏ニ、風ノ前ノ塵ニ同シ
> 角墓無キ身ヲ持テ、彝倫ヲ欺キ、人ヲ誣ルコト、<u>神明三宝ノ恐モ有</u>

Hosei University Repository

ソカシ、今吾カ財ヲ計ルニ、酋千金ノミニ非ス、今母コセ、歳六十余、縦百歳迄存ヘ給ヒ、自百歳ニ至ル共、金装ノ尽ヘキニモ非ス願ハ、中将殿ヲ、養育セサセ給ハヽ、難有御情テ社、侍ハンスレ、然ラスハ、自、中将諸友ニ、乞食仕ラン（631頁下～632頁上）

李娃は人の命の儚いにも関わらず、人倫にもとる行為をしたことで「神明三宝ノ恐モ有ソカシ」としている。ここで「神明三宝ノ恐モ有ソカシ」とは、『平家物語』巻一「清水寺炎上」の「叡慮に背き給はで、人の為に御情けを施させましまさば、神明三宝加護あるべし」というくだりを用いている。つまり、天に背かず人に情けを施せば神の御加護があるが、そうでなければ必ず身に禍があろうというのである。[44]そして李娃は、妓母が百歳まで生きても尽きない財産があることを説き、安則を養育できないなら、共に乞食をすると主張している。

妓母はこの言葉を聞いて、「痛制シナハ、又目ノ前ニ、憂別モ有ヌヘシト、思侘テ、有繋、重テ制シモセス　其ノ儀ナラハ、何カ苦シウ候ヘキ、兎モ角モ、ワコセ次第」[45]と言うのである。よって、妓母は最終的に李娃に従っており、二人の間になんら軋轢は生じない。

一方、『王慶龍伝』では、妓母が玉丹と慶龍との関係に常に関与している。慶龍の財産を使い果たさせたのも玉丹ではなく妓母である。玉丹は、むしろ適当な時期を見計らって父母の元へ帰り、科挙を受けるよう勧めている。しかし慶龍は去ってしまえば、必ずや妓母が他の客を勧め、「節」を守ろうとする玉丹が自害するのではと恐れ、なかなか帰郷できない。そして遂に妓母の策略によって玉丹と離れ離れになってしまうのである。その後妓母は、盗賊を使って慶龍を殺害しようとしたり、玉丹を趙賈の妾にするため商家の寡婦と共謀するなどして、その貞節を奪おうとするのである。

これに対し、玉丹はありとあらゆる抵抗をし、最後には妓母と仲たがいをし、別れて暮らすことになっている。故に『王慶龍伝』では、「節」を守ろうとして妓母と対立する玉丹の姿が描かれ、儒教的徳目の実践を強調しているともいわれるが、[46]後半部では玉丹が、趙賈の妻の筆跡をまねた手紙を巫夫に送り、二人を姦通させるなどの大胆な行為も起こしており、「守節」のためには手段を選ばないというストーリーになっている。

Hosei University Repository

その一方で、慶龍が暗行御史として玉丹を救った後、父の命で形式的に結婚した盖氏を離縁しようとするが、[47]玉丹はこれに反対し、娼家の賤しい身分で、人を欺き「守節」したことは、「節」を守れなかったも同然であるとしている。そして盖氏が離縁されれば、「節」を守るため再嫁せず、苦しい境遇に陥るだろうとし、それならば自分も身を引くというのである。[48]

結局、慶龍は玉丹を側室とし、盖氏とも円満に暮らすのだが、玉丹のこうした自己卑下とも取れる言動は、元良家の娘であると主張した以前のものとは異なり矛盾を感じる。しかし、ここではそうした矛盾よりも、「節」を極端に強調した部分であるといえよう。また玉丹が方法を選ばず必死で「節」を守ってきたのは、「平生之約」すなわち生涯仕えるという約束を果たすためとあるが、このことも「節」を重視した作者の意図の表れだといえる。

こうした『王慶龍伝』に見られる妓母との対立と、「守節」へのこだわりは、『李娃物語』には見られない側面である。李娃は、最後まで妓母との絆を保ち、安森と婚礼を挙げた後も、妓母のために別館を建て、お互い母子としての仲を維持している。[49]また『李娃物語』の最後に「偕老不離ノ契ヲ締ヒ、烈女不更二夫」というくだりが見られるが、その間、李娃が「節」を守ったかどうかは読者には分らない。また、李娃は、安則が大納言となり任地に赴く際に、そのまま別れて妓母と暮らすことを選択しており、生涯を安則に仕えようと約束したわけではない。『李娃物語』の場合、「節」より、乞食となった安則に再会した後の李娃の献身ぶりが描かれているだけである。

4.「色」に対する見解

既に一、二章で述べたように、『李娃物語』では「情」がなかったことへの悟りから李娃の安則に対する愛情が芽生えるのであるが、『王慶龍伝』では「節」を守ることが玉丹と慶龍の愛情を貫く手段となっている。また「守節」に対しては、作者の理念を表しているともいえるのだが、ここでは両作品の「色」に対する見解を比較したい。なぜならば『李娃物語』での「色」は「恋」の延長線上にある反面、『王慶龍伝』でのそれは

Hosei University Repository

「節」に反する概念として否定的に表されており、その違いが両作品に見られる愛情関係と深く関わっているからである。

『李娃物語』の場合、「色」に対する見解は、李娃との恋のためなら命も惜しくない[50]と安則が述べた後に、地の文として次のように表されている。

> 嗚呼悲哉、古人ノ言ニ、少之時戒之在色ト云ヘリ、加旃賢賢易色、コレ孔子ノ魯論ニ、記セル所也、中将ホトノ、道学ベル人ノ、角有ヘキ共覚スト、友ニ興サメタル躰ニソ、見エシ
> 去ハ、可堪モアラヌ事ニモ、能堪忍フハ、色ヲ思カ故也、誠ニ愛着ノ道、其根深ク源遠シ、六塵ノ楽欲[51]多トイヘ共、皆厭離シツヘシ其中ニ、唯彼惑ノ一難止ノミソ、老タルモ若モ、智アルモ愚ナルモ、替ル所ナシト、吉田ノ兼好法師カ、言置キケンコト、復タ、女ノ髪筋ヲヨレル網ニハ、大象モ能縛レ、女ノハケル履ニテ作レル笛ニハ、秋ノ鹿、カナラズ寄トゾ、言イ伝ヘ侍ルモ実皆理ニソ覚ル
> (622頁下～623頁上)

ここで作者は論語の一説を引用し、「少き時は戒むることこれ色に在り」「賢賢として色に易えよ」[52]とし、安則ほどの学問を学んだ人が「色」に迷うのは「興サメタル躰ニソ、見エシ」と述べている。しかし一方で、『徒然草』の一説[53]を挙げ、「可堪モアラヌ事ニモ、能堪忍フハ色ヲ思カ故也」と色欲の強さを述べ、自戒すべきにもかかわらず、老若男女はもちろん、安則ですら「色」に迷わざるえないことを「理」だとしている。このことから『李娃物語』では、「色」そのものを否定しているわけではなく、人なら誰しも惑う「色」であるからこそ慎むべきであると説いていることが分かる。

また作者は、「色は人性を代え、その楽が極れば哀しみが生ず」[54]と述べている。勇ましい中国の王といえども、色に溺れれば命を捨てざるを得ず、安則は命こそ捨てなかったが、落ちぶれて「末代までの恥辱」となったのである。よって「唯人ノ慎ムヘキハ、此道也」と説くのであるが、[55]このことは、後に安則が父と再会する場面でも表される。

Hosei University Repository

汝世ニ有テ、父ノ名ヲモ顕シ、其身モ、芳ヲ万年ニ流ヘタランコソ、誠ノ人ノ道ナルニ、角浅猿ク成ハテヽ、父ノ名ヲ塵ス耳ナラス、余多ノ親戚、万世迄ノ恥辱也（中略）角成ヌル上ハ、生テ与有恥、死テ孰若無愧、汝、相構テ吾ヲ不可憾、汝心テ心ヲ可恨（629頁下）

父の安森は、安則が「色」に溺れ、哀歌の歌い手になったことを、「父の名を汚すのみならず、多くの親戚や万世迄の恥辱也」としている。そして「生き恥をさらすより、死んだほうがまし」であると、刀の背で安則を打ち殺そうとするのである。ここで安森は我が子に向かって「己の心を恨むべし」といっているが、この言葉から、「色」に溺れた安則自身の哀れさがうかがえる。そこには「楽が極れば哀しみが生ず」という「盛者必衰の理」があり、作者の仏教的な倫理観を表している。

一方、『王慶龍伝』では、酒屋と娼楼に興味を示す慶龍に対し、それを諫める老僕の言葉として、「色」に対する見解が示される。

老僕跪進曰　郎君郎君　慎無為也　酒是狂薬　着口心蕩　色為妖狐　入眼魂迷　郎君年幼書生　志慮未定　若使両物一寓心目　不為彼祟所動者幾稀　不如不見之為愈也（190頁）[56]

ここで老僕は「色」は「妖狐」であり、見ないほうがましであると慶龍を諭している。そして諫めを聞かないことを悟ると、責任を感じ自害してしまうのである。

不意中路　為妖物所祟　遽至於此極也　銀子不足惜　惜渠之陥於不義也（中略）終使郎君　惑於妖物　中途忘返　今既失銀子　又失郎君　僕之罪當誅　将何面目　帰見閣老乎（197頁）[57]

老僕にとって「色」は「妖物」であり、慶龍を「不義」に陥れた「否定的なもの」である。よって、慶龍を諭せなかったことは自らの罪であると認識している。

このように老僕を通して語られる「色」への否定は、男女の愛情関係の

Hosei University Repository

あり方とも深く関わっている。というのも、そもそも「娼楼」への好奇心から始まった愛情関係というのは、「色」を抜きにしては語れないのであるが、『王慶龍伝』ではそれを否定しようとするが故に、作品前後の内容の違いが見られるからである。

その例として、慶龍が玉丹に会う時の言葉が挙げられる。最初、慶龍は玉丹を一目見て、その美しさに引かれ、老婆に玉丹の素性を尋ねる。その際に「私が会いたいというのは、ただ美人を見たいというだけで、合歓の心があるわけではない」[58]というのである。ところが玉丹と実際に詞をやり取りする時は、「ひょっとして玉丹と一緒に合歓することが出来ないかと心中疑い懼れ」[59]ており、最初に言った「合歓の心があるわけではない」という言葉とは全く違っている。[60]

また、慶龍が玉丹への情に溺れ五、六年を費やしたにもかかわらず、後日、父の出題する作詩試験に合格するという箇所もそうである。

作品前半部での描写では、慶龍が玉丹と合歓した後、情愛に堕溺し、歓楽に耽って日夜を過ごしている。[61]そして高楼を建て、北楼と称して玉丹と共に住み、妓母の策略で五、六年の間に金銭を使い果たすのである。この時、玉丹が慶龍に、情に溺れず父母の元に帰り、科挙に合格するよう説得するくだり[62]はあるが、慶龍が勉学に励んだという内容はない。

ところが、後半部で慶龍が父と再会し試験を受ける際には、「徐州に五六年いながら、玉丹と共に文墨に専事した」[63]ことになっているのである。この時慶龍は父の怒りを買い、棍棒で打ち殺されそうになるが、[64]それを見かねた父の壻は、持ち帰った財宝を見れば、酒色に身を過ったのでないことは明らかと擁護している。[65]そして父の出題する作詩試験に合格した後は、「長く帰ってこなかったのは、必ず途中で読書に耽ったからであって、色を好んだからではない」[66]と認められるのである。

このような前後の内容の違いは、当時の両班階級の「色」に対する否定観を表すのと同時に、『王慶龍伝』における男女の愛情関係が儒教的徳目の支配から決して外れていないことを示唆している。

5．おわりに

以上、『李娃物語』と『王慶龍伝』における男女の愛情関係について、

Hosei University Repository

男女の結縁過程、妓母と女主人公の関係、そして「色」に対する見解を中心に考察した。それらをまとめると次のようになる。

まず男女の結縁過程に関しては、『李娃物語』では、「恋」という表現で始まり、仏教的な悟りをめざす世界から愛欲の世界への転落を示している半面、『王慶龍伝』では女性を仙女にたとえ、神仙思想を反映した「非現実世界」として示される。また李娃は白拍子として「人ヲ誑カ道」を実践しており、「情無リシ故ソカシ」と悟るまで、真の愛情関係に至らない。しかし、玉丹は「節」を貫くことで愛情関係を維持しようとしており、そこには妓女の身分上昇意識が見られる。

次に妓母と女主人公の関係において、『李娃物語』では、二人の愛情関係は基本的に当事者同士によって進められ、李娃と妓母の間になんら軋轢がない。しかし『王慶龍伝』では、妓母はその金銭欲から、二人の愛情関係を阻む障害物としての役割を果たしている。また『王慶龍伝』に見られる「守節」へのこだわりは、『李娃物語』には見られない。『李娃物語』の場合、「守節」より、「情(なさけ)」無きことへの反省と、その後の献身ぶりが描かれるのである。

最後に「色」に対する見解については、『李娃物語』では「色」そのものを否定しているわけではなく、人なら誰しも惑う「色」であるからこそ慎むべきであると説いている。またその根底には「楽が極れば哀しみが生ず」という仏教的倫理観がある。一方、『王慶龍伝』では、「節」を強調するあまり、「色」そのものを否定しており、男女の愛情関係すら儒教的徳目の支配下にある。

これらのことから、『李娃物語』では、「恋」の煩悩に対し、「あはれ」を知り「情(なさけ)」を悟るというストーリーなのに対して、『王慶龍伝』では神仙と仙女に例えられる才子佳人が出会い、「節」を守るストーリーであるといえる。また、男女の仲を「多生ノ縁」とし、「諸行無常、盛者必衰の理」といった仏教思想が根底にある『李娃物語』に比べ、『王慶龍伝』では身分の上下関係が見られ、専ら「節」を強調する点で、「二君不仕、二夫不更」といった両班社会の儒教理念を男女の愛情関係に大いに反映させているといえよう。

Hosei University Repository

注

1　松本隆信『室町時代物語大成　補遺二』（角川書店、1988）

2　平出鯉二郎『近古小説解題』（大日本図書株式会社、1909）

3　作者については、五山の禅僧の一人とする説がある。斎藤栄子「『李娃伝』とその日本文学への影響」（『東洋文学研究』第6号、早稲田大学、1957）

4　『王慶龍伝』に関する詳しい研究史については宋河俊「『王慶龍伝』研究」（高麗大学校碩士学位論文、1998）を参照されたい。

5　馮夢龍編『醫世通話』第24巻に収録。『玉堂春落難逢夫』は『李娃伝』の飜案小説であるが、その内容は後半部にかなりの独自性が見られ、どのような過程を経て成立したのかはっきりしない。『玉堂春落難逢夫』に影響を与えた他の中国作品には、『全象海剛峯居官公案伝』巻1の29回に収録されている「妬奸成獄」と『情史類略』巻2に収録されている「玉堂春」がある。上掲論文、26～27頁。曾天富「韓国小説의 明代擬話本小説受容의 一考察」（釜山大学校碩士学位論文、1988）32～33頁。鄭煥局「『王慶龍伝』연구」（『韓国의 経学과 漢文学』大学社、1996）833～835頁。

6　この伝奇集は1956年に鄭炳昱によってソウルの古本屋で発見され、「慎独齋手澤本伝奇集」と名付けられた。「慎独齋手澤本伝奇集」には、『万福寺蒲標記』『劉少娘伝』『周生伝(半面のみ)』『相思洞餞客記』『王慶龍伝』『王十朋奇雨記』『李生窺墻伝』『寡妓嘆』『崔文献伝』『玉瑞春伝(半面のみ)』が収録されており、『王慶龍伝』には「兔臘月旬慎独齋主人書」という後記がついている。鄭学城『역주 17세기 한문소설집』（삼경문화사、2000）261～265頁。大谷森繁「朝鮮と日本における明・清小説受容の様相と特色」（『大谷森繁博士古希記念朝鮮文学論叢』白帝社、2002）8～9頁。

7　曾天富「韓国小説의 明代話本小説 受容 研究」（釜山大学校博士学位論文、1995）

8　作品に共通する大まかなあらすじは次のようになっている。男主人公が女主人公である娼妓を愛し、瞬く間にお金を使い果たす。その後、娼妓は行方不明になる。男は乞食同然となるが、再び女主人公と会い、その助けによって立身出世する。最後に二人は結ばれ、幸せな結末を迎える。

Hosei University Repository

『王慶龍伝』は後半部において次の点で『李娃物語』とは大きく異なっている。1）玉丹が老婆を通して慶龍と再会し、慶龍へ財物を返す点。2）財物を返してもらった慶龍が父母の元で科挙試験の勉強をする点。3）妓母の計略で趙賈の妾となった後、趙賈を毒殺した嫌疑で獄に入れられ、暗行御史になった慶龍に救われる点。

9　愛情問題を取り上げた『李娃物語』の研究については、三田明弘「『李娃伝』と『李娃物語』－愛情小説と贖罪の物語－」（『早稲田大学教育学部学術研究』43号、1995）がある。ここで氏は『李娃伝』の女主人公が愛情で男主人公に献身したのに対し、『李娃物語』のそれは愛情より贖罪の奉仕へと変化していることを述べた。しかし、贖罪意識は『李娃伝』にも見られ、特に『李娃物語』だけ「贖罪の奉仕へと変化」したとは言い難い。また『王慶龍伝』の研究としては、朴逸勇『조선시대 애정소설』（集文堂、1993）があり、愛情小説として『王慶龍伝』をとらえ、『玉堂春落難逢夫』比べて、男女の出会いの持つ意味が大きいことを示唆した。

10　松本隆信、前掲書。本文の引用は全て本書による。

11　621頁下～622頁上。

12　三田明弘、前掲書、39頁。

13　世之所謂酒肆娼楼　豪奢華麗者　未知果如何也　今欲少停征驂　暫得遊覧（鄭学城、前掲書、190頁）世の所謂酒屋と娼楼が豪奢で華麗なのは、果たして如何なるものか未だ知らない。今少し馬を留めて、暫し遊覧しよう。以下『王慶龍伝』の本文引用は全て本書による。また本文の日本語訳は全て筆者による。

14　その中に若く美しい娘が一人いて、手に青い芙蓉の花を一輪握り、列を外れて一人立っているのだが、輝く美しい瞳は神仙を見るが如くであった。慶龍は思わず視線を注ぎ、一度会いたいと思ったが、ただ縁をなすものがないのが恨であった。（中略）天性の姿、仙女の如き様子が朝雲より百倍勝っており、まさにこの世に見たこともない傾国である。（中略）慶龍は玉丹の美しい顔と華やかな装いを見るに、この世の人でないようなので、不覚にも益々心が躍り喜んだ。

15　唐代伝奇の『鶯鶯伝』には張生と崔氏の最初の逢瀬の場面で「張生飄飄然として、しばらくは神仙の徒かと疑い、人間より到れるを謂わず」と

Hosei University Repository

表現している。高橋美千子「元稹の夢についての考察」（『中国文学報』32、中国文学会、1980）69～70頁。

16　金東旭「高麗期文学의 概観과 그 問題点」（『高麗時代의 言語와文学』蛍雪出版社、1982）213頁。

17　李演載『高麗詩와 神仙思想의 理解』（亞細亞文化社、1989）194頁。こうした表現には李白文学の影響があると思われる。

18　『搜神記』にある、中国伝説の仙女の杜蘭香。洞庭湖近くで修行していた張碩に嫁し仙術を教え、夫婦共に神仙になった。

19　裴鉶の唐代伝奇に登場する呉彩鸞。呉猛の娘で崇元観から道術を習い、書生の文簫に嫁した。

20　『続幽怪録』にある、月の中で男女の縁を結んでくれる「月下老人」がいるという伝説。

21　唐の伝奇『裴航』にある「藍橋便是神仙窟」という詩句に由来する。小説の主人公「裴航」は藍橋近くの小屋で仙女の雲英と逢い夫婦になったが、この運命を雲英の姉の樊夫人があらかじめ詩句で知らせた。

22　『剪燈新話』収録の「聯芳楼記」の女主人公蘭英と蕙英の名前を引用した。

23　中国陝西省にある地名。玉がたくさん取れる。

24　昔、本で神仙を学び、金丹を焼き尽くして10年になる。洞庭湖の蘭香と鐘陵の彩鸞が、月下老人の縁結びをどうして知っていようか。今夜互いに逢って歌を歌い、白玉簫を吹き、緑綺絃を奏でる。酒を楽しみ杯を重ね、枕一つで横になれば、いつの間にか藍橋に向かいまどろむ。一度、神仙楼台の麗しき宴に上がり、佳人美人を見ると、蘭と蕙が逢い連なり、天質は優雅、仙女のように艶やかで、これは紅蓮と白蓮を映したよう。歌詞は美しく、曲調は清く、海に月を映した珠の如く明るく、藍田に霧がかかった玉の如く潤う。ふと思う、わが身は神仙となり、空を舞い蓬萊山に到ったかと。

25　例えば、『周生伝』では周生が仙花を垣間見た後、「魂が雲の外に飛び、心は空中に在り（魂飛雲外　心在空中）」、「仙娥」即ち「仙女に出会った（九華帳裏夢仙娥）」と表現している。また、『韋敬天伝』では韋敬天が蘇淑芳を垣間見た際に、「優雅な仙女のような姿がこの世の者とは思われなかった（綽約天姿　非世上人也）」と描写している。이상구訳註

Hosei University Repository

『17세기 애정전기소설』（月印、1999）237、251頁参照。
26　朱子学では天理と人欲を相容れない対立関係と設定し、「人欲を去り、天理を保存せねばならない（去人欲　存天理）」という命題を立てている。林熒澤「伝奇小説의 恋愛主題와 《韋敬天伝》」（『東洋学』22、檀国大学校東洋学研究所、1992）29～33頁。
27　従本女房ハ、白拍子ノ事ナレバ、中将殿ノ姿ヲ見テ、魂テ悟リテ参ラセ、猶眸ヲ凝ラシ、破顔ノ化粧、寔ニ、不言ノ口先咲リトモ謂ツヘシ（621頁下）
28　624頁上。
29　625頁上。
30　相良亨『日本人論　相良亨著作集5』（株式会社ぺりかん社、1992）27頁。
31　男女の縁宿世、今に始めぬ事ぞかし。千年万年と契れ共、魂て離るる中もあり。白地とは思へ共、長らへ果る事も在、代に無定き者は、男女の習い也。（『平家物語』巻一「義王義女」）
32　江には梅があり、山には竹がある。清い枝はおしなべて草木に同じ。春に咲かず、秋に枯れず、凜とした姿で荒苔にのんびりと身を託している。ゆったりとした枝は霜の後で青く、冷たい葉は雪の中で香る。花を尋ねる客に事寄せて言うが、どうか花柳の場と比することなかれ。
33　既能領略遍　願将移一場（195頁）
34　丹聴其歌畢　始開青娥　暗注秋波（195頁）
35　今若一媚公子　誓不再事他人　恐公子以我為路柳墻花　而一折永棄故不敢従命焉（中略）公子風裁神秀　才調清高　非不欲奉仕巾櫛　而妾之所蘊若是　公子其思之（195～196頁）一度関係を結べば他人とは逢わない決心なのに、妓女として扱われ、そのまま捨てられるのではないかと、敢えて命に従わない次第です。公子の風裁が非常に秀れ、その才が清く崇高なので、お仕えしたくないわけではございませんが、妾の思う所をよくお考えください。
36　龍驚喜起拜曰　恭聞至言　不勝欣慰　若非素性貞静　何以至此　僕雖無醮三之禮　娘未守従一義耶　誓與娘子　終得偕老（196頁）慶龍は驚き喜び、起きて拝して曰く、おっしゃることを承るに、嬉しく慰められることこの上ない。もし素性が貞静でなければ、どうしてこのようなことが言

Hosei University Repository

えましょう。私が婚礼を挙げなかったからといって、娘の一夫に従う義を守れないことがありましょうか。あなたと共に誓って、最後まで偕老いたしましょう。

37　丹笑而応曰　若能如此　為賜不浅（196頁）

38　ここでいう「情」とは室町時代後期の『閑吟集』に見られる「ただ人は情あれ」といった「情」を指す。相良亨、前掲書、14～15頁。

39　曾天富、前掲博士論文、19頁。

40　209頁。

41　625頁上。

42　626頁上。

43　625頁下。

44　ここでの李娃は「因果応報」や「盛者必衰の理」の前に屈服していないか、とする主張もあるが、それ以上に「人に情けをかけること」に気づいた李娃の心に主眼があると解釈する。斉藤喜代子「李娃と李娃物語」（『城南漢学』第8号、立正大学漢文研究会、1966）10～11頁参照。

45　632頁上。

46　『王慶龍伝』は当時の儒教的道徳律の実践を強調する方向に改作されている。曾天富、前掲博士論文、20～21頁。

47　慶龍は玉丹を思って一度も盖氏と共寝していない。

48　娼家賤質　受而媚君　身已陋矣　巧言令色　瞞人而守約　節已畢矣　欲図生還　以計殺人　謂善乎　久在縲絏　為世所陋　可為吉乎　妾之所以忍而不死以至今日者　徒欲更待君子　得奉巾衣　以遂平生之約而已　是可謂賤妾之幸矣　公子之楽也　豈以葑菲之微質　遽充実蘋蘩之奉乎　況見内子貞操雅態　甚合家母　公子亦復離而黜之　彼家父母　必奪其志　然則内子之不欲事於他人者　猶玉丹之不欲媚於趙賈也　以我方人　誠甚怜惻　若離内子　妾亦當退（236頁）娼家の賤しい身分で金をもらい君を誘惑したので、体は既に貶めたも同然であり、また巧言令色で他人をだまし約束を守ったので、節は守れなかったも同然です。生きて帰ろうと計略を使って他人を殺したので善だとは言えず、長く罪人の身で世に賤しく生き長らえてきたので吉だと言えましょうか。妾が死にきれず今日まで生きてきたのも、ただ君にもう一度お目にかかり、生涯仕えようとという約束を果たそうとしたからです。妾にとってこれは幸いであり、君にとっては楽しみで

Hosei University Repository

あるとはいえ、どうして賤しい身から急に嫁となることができましょうか。それに夫人を見るに貞淑で一家の母としてぴったりといえましょう。もし君が離縁すれば、あちらのご両親は必ず他家に再婚させようとなさるに違いありません。そうなれば夫人は節を守ろうとし、この私と同じ境遇に到ることでしょう。私が経験してきたことですので本当に気の毒です。もし、夫人が帰されるのであるならば、私も当然身を引きましょう。

49　女房ノ母コセヲモ、別舘ヲ建参ラセテ、尊長御前トソ、冊レケル、去ハ是ヨリ、女房、階(ママ)老不離ノ契ヲ締ヒ、烈女不更二夫トソ、成ニケル（634頁上）

50　金玉ナラテ、命ナリ共、ナト惜カルヘキニ非ズ（622頁下）

51　六塵とは色、声、香、味、触、方(意)の清浄な心をけがすもととなるものをさす。楽欲は願望要求の意の仏語。

52　『論語』学而の「賢賢易色」と季氏の「少之時　血氣未定　戒之在色」をさす。

53　『徒然草』第九段。

54　勿内荒於色、内荒代人性、楽不可極、楽極生哀、コレ張蘊古カ筆ノ跡、今コソ、被思知ケレ（627頁）『旧唐書』巻190上にある張蘊古の伝記参照。『旧唐書』では「内荒代人性」の「代」が「伐（みだす）」となっている。

55　サレハ、周ノ幽王ノ、驪山燧ヲ挙テ、天下ヲ乱リシモ、褒姒カ故、唐ノ玄宗ノ、蜀道ヘ蒙塵シテ、世ヲ被奪シモ、貴妃ノ為、又、呉王夫差ハ、西施ニメテヽ、遂ニ命ヲ、勾践ニ被取給ヒキ　是等ハ皆、サシモ武カリシ王ナレ共、色ニメテヽ命ヲ捨、或ハ、國ヲ被奪給フソカシ、今コノ中将ハ、悉ニ命ヲモ捨給ハス、角成ハテヽ、末代ノ恥辱、浅増トモ中々也、去ハ、唯人ノ慎ムヘキハ、此道也（630頁上下）

56　老僕が敢えて進言して曰く、若君、若君。そのようなことは慎んでください。酒は狂薬で、口に着けたら心は放蕩となり、色は妖狐と同じで、目に入れたら魂が迷うことでしょう。若君はまだ幼い書生で、心がしっかりと定まっていません。もし酒色をいっぺんに目にし心に入れれば、それらに祟られ心動かされないことは稀なので、いっそのこと見ないほうがましです。

57　途中で思いもよらず妖物に祟られ、にわかにとんでもない事になって

Hosei University Repository

しまった。お金はともかく、不義に陥ったとは悲しいことよ。(中略) 若君を妖物に迷わせ、帰ることを忘れさせてしまった。今やお金も若君も失い、死に値する罪を犯した以上、どの面下げて大臣様にお会いできようか。

58 我之欲見者　只欲観絶色而已　非有意於合歓也 (191頁)

59 龍恐丹難與為歓　心自疑懼　遂和其曲　以観其意 (195頁) 慶龍はひょっとして玉丹と一緒に合歓することが出来ないかと心中で疑い懼れ、遂にその曲に和答し、玉丹の心を探った。

60 これらの矛盾は多分に当時の両班階級の建前と本音を示したものといえよう。

61 龍遂與丹就寢　喜可知矣　龍自此之後　堕情溺愛　欲去未去　耽歓取楽　靡日靡夜 (196頁) 慶龍は遂に玉丹と共に就寝するも、その喜びや推して知るべし。慶龍これより後、情愛に堕溺し、去ろうと欲せど未だ去れず、歓楽に耽って日夜を過ごす。

62 勿傾兒女之深情 (中略) 還郷省親　読書勤業　妙年科第　早得當路事君　則公有立揚之誉　妾遂團圓之約矣 (198頁)

63 在徐州五六年　與玉丹專事文墨 (228頁)

64 汝叛父忘帰　一可殺也　耽酒敗身　二可殺也　滅財覆業　三可殺也 (227頁) 汝の父を裏切り帰るのを忘れたのが第一の殺すべきことで、酒に溺れ身を滅ぼしたのが第二の殺すべきことで、財宝をなくし務めを怠ったのが第三の殺すべきことである。

65 此兒年少迷色　自不能速帰爾　豈無愛親之心乎　今日之得返　可見其良心也　況其財宝　今尽載還　不敗於酒色者　亦明矣 (228頁) この子は幼いので、女色に迷い、自ら帰れなくなっただけで、どうして父上を愛する心がないといえましょうか。今帰ってきたのを見れば、その良心を知ることが出来ましょう。それに財宝を全て持ち帰ってきたから、酒色に身を過らなかったのは明らかです。

66 夫人之子　久而不返者　必以中途　耽読之故　非好色也 (229頁)